

日本中國學會報 第69集
2017年10月7日 発行 抜刷

学 界 展 望 (語学)

森 賀 一 惠
白 田 真 佐 子
高 久 由 美
松 江 崇
竹 越 孝
下 地 早 智 子
秋 谷 裕 幸

●語学

はじめに

『日本中国学会報』第69集「学界展望」語学部門（2016年1月～12月）は、前年度に続いて、富山大学人文学部（森賀一恵）がコーディネーターを引き受け、語学領域を七分野に分け、それぞれの分野の専門の学会員に文献目録の点検も併せて執筆をお願いした。音韻は白田真佐子（愛知大学）、文字は高久由美（新潟県立大学）、訓詁は森賀、文法・語彙（先秦～唐宋）は松江崇（京都大学）、文法・語彙（近世）は竹越孝（神戸市外国語大学）、現代語文法は下地早智子（神戸市外国語大学）、方言は秋谷裕幸（愛媛大学）が担当した。

「2016年語学関係論著文献目録」は、2016年1月から12月まで国内で刊行された単行本・論文を対象としている。文献目録を作成して改めて思ったのは、語学部門に属する論著は、哲学部門・文学部門に比べて多岐に亘るということである。書かれた内容だけが問われるわけではないので、対象とする資料も範囲が広く、研究方法も多様である。小学の系統を継ぐ文献学もあれば、出土文献研究もあり、伝世文献と出土文献を併用する研究もある。音声学の知識を以て中国諸方言を記述する方言調査もあれば、中国語だけでなく諸外国語を読みこなして対音資料や対訳資料を扱う研究もある。また、言語学理論を応用した文法研究だけでなく、日中対照言語学、中国語教育学も「中国語学」の領域に属する。語学部門全域を俯瞰しようとするれば、従来の中国語学、中国哲学、中国文学及び言語学全般についての知識のみならず、高い語学能力を持ち、考古学、日本語学、教育学などにも通じていなければならない。その所為か、最近では語学部門担当校の選定が難航することも珍しくないときく。今回も富山大学は文献リスト作成のみ担当し、展望は所属機関に拘らず、それぞれの分野の研究状況に詳しい学会員をお願いした。そのような事情もあって、2017年以降の学界展望は日本中国語学会に委嘱されるということである。

中国語学部門の全般的な研究動向をみると、現代語文法研究は今年度も活況を呈しており、「教育」と合わせると「2016年語学関係論著文献目録」の三割を占める。また、出土竹簡関連の論考も多く、「文字」が目録の約六分の一を占めるのはそのためである。数はそれらに及ばないものの、音韻学、言語史研究にも優れた業績が少なくないことは以下に記される通りで、ここで贅言を弄するまでもない。（森賀一恵）

一、音韻

2016年5月28日、慶谷壽信氏（東京都立大学名誉教授）が他界なさった。中国語学、特に音韻・文字・方言の研究者は、都立大の学生でなくても、直接教えを受けたことがあったり、著作から学ぶところが多いと思う。2016年度は受業生を中心として追悼文等が相当数発表された。佐藤進氏による追悼文「慶谷壽信先生をしのぶ」（『中国語学』263）は、慶谷先生の中国語学会における活動や貢献が中心となっている。『開篇』35は「慶谷壽信先生追悼記念号」として「慶谷壽信名誉教授業績（編著書等目録）」と追

悼文十三編を取める。吉池孝一・中村雅之両氏による対談「慶谷壽信先生の学問などについて」(1) - (5) は『KOTONOHA』(162-166) に連載され、それは2017年も続いている。

平山久雄氏(東京大学名誉教授)は2016年5月26日東京大学文学部主催「第24回布施学術基金公開講演会」で講演を行った。その原稿をまとめたものが「唐詩の韻律—漢文訓読の彼方—」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』19)であり、講演会を聞く機会がなかった後学にも、多大な示唆を与えてくれる。平山氏の論考は音韻・方言とも海外で公刊ということが多く、「『切韻』本是陆爽献给隋太子杨勇说补证」(『语言学论丛』53)も中古音研究の上で有益である。

以下、まず単行本を取り上げたい。

木下鉄矢『清代学術と言語学 古音学の思想と系譜』(勉誠出版)は2014年著者が他界した後、研究者仲間によって2016年に出版された。木下氏は中国思想研究者であるが、氏の古音学研究はここで言及するに値する。第1部に含まれる「古音学の歴史—学的認識の形成及び深化の過程—」(もと1977年)については、個人的にも思い入れがある。この木下氏の論考は、三十年くらい前コピーで読んでいたものである。文献からデータを抽出し、それをもとに論を進めるという方法で古音学を学んでいた私には、別の面からのアプローチを教示してくれた。その後2000年日本中国学会全国大会で一度お目にかかり、再び直接教えを請うこともなく、遺著という形で拝読することになり、とても複雑な思いがする。

太田斎『周法高 中国語文研究 訳注』(『神戸市外国語大学研究叢書』59)は中国語音韻史のみならず、中国語学の広い領域を含むが、ここで紹介しておきたい。原文の本文・注の訳に加え太田氏が訳注を付けており、綿密な仕事と言える。大学研究所発行の書物で部数も限られるが、ウェブからダウンロードも可能で、利用もしやすい。太田斎「韻書と等韻図Ⅱ(完)」(『神戸市外国語大学外国語学研究所外国語学研究』92)は、『韻書と等韻図Ⅰ』(『神戸市外国語大学研究叢書』52、2013年)の続編である。

遠藤光暁『元代音研究—『脈訣』ペルシャ語訳による—』(汲古書院)は研究篇・資料篇からなる。ペルシャ語が分からないと難解に感じるが、序論・結論・あとがきを読むと大筋はわかる。著者の学部4年生の頃、『宝書』という書物の存在を知った(研究篇、207頁)ということなので、長年温めていた心積りが書物にまとまったわけである。元代音研究といえば中国音韻学史の研究領域であるが、ペルシャ語資料、具体的には「『脈訣』ペルシャ語訳に含まれる音訳」(研究篇、179頁)を用いたところに研究の独創性があることは誰の目にも明らかである(『脈訣』は『宝書』四巻の第一巻。現存するのは『脈訣』のみ。研究篇3頁参照)。「本資料が元代の標準音を示す『蒙古字音』系官韻とパスパ文字碑文や『中原音韻』などの漢人の資料に次ぐ重要度を持つことが明らかとなった。」(研究篇、179頁)と著者が指摘するように、今後の元代音研究にとって、遠藤氏の研究が有意義であることは疑う余地がない。

次に「2016年語学関係論著文献目録」に基づき論文を取り上げる。今回は紙幅が限られているため、時代を大きく区分し、一著者一編に限定して論文を紹介し敬意を表す

る。

上古音の論文として、丸井憲「周春と「乾嘉の学」—錢大昕・盧文弨との交遊・論争を接点として—」（『中国詩文論叢』35）がある。タイトルからすると清朝考証学の論文であるが、内容をよく読むと古音学に関する内容となっている。

中古音の論文は内容もバラエティに富み、以下のような論文がある。王正「『大廣益會玉篇』と『篆隸萬象名義』の同収字の音注」（『中国言語文化学研究』5）、佐々木勇「広島大学新収石山寺本『玄應一切經音義』卷第十承安五年写本」（『国文学攷』230）、住吉朋彦「五山版『韻鏡』再考」（『学林』62）、陳小珍「五臣注《文選》における「重韻」問題」（『語学教育研究論叢』33）、田婧「建安七子の作品にみえる押韻 一附：七子韻譜」（『中国学志』31）、水谷誠「杜甫詩での重複韻字について—破音字をヒントに漢字の桎梏を考える杜甫—」（『中国詩文論叢』35）、吉池孝一「有坂秀世氏の音韻觀念の変遷について—唐代長安の m- と mb- をめぐって—」（『KOTONOHA』169）、李乃琦「玄応音義に関する研究史と課題」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』16）。著者の中には指導的立場にある研究者や独立研究者のほか、大学院生、そして中国語学の隣接分野の研究者も含まれている。隣接分野といえば、住吉氏の論文は書誌学の面から『韻鏡』を研究している。中国では『韻鏡』が佚書であり、日中の音韻学者にとって『韻鏡』の書誌学的研究は役立つに違いない。

近世音（近代音）の論文としては、浦山あゆみ「『元音統韻』未収の部分について—『皇極統韻』「字有三合曲有四合」を中心に—」（『文芸論叢』86）、董冰華「《中原雅音》の再輯佚與新復原」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』19）がある。中古音と近世音（近代音）の区分は論文にキーワードがない場合、読み手が判断するしかない。董氏の論文は日本での訪問研究の成果といえよう。

朱鵬「漢語切韻史上における「官話合声字母」の意味」（『中国文化研究』32）は現代音のみならず、時代的にも大きな広がりがある。

なお、紹介しきれなかったものについては「目録」を参照されたい。（臼田真佐子）

二、文字

昨年同様 2016 年も、新たに公開された出土文字資料に関する多くの論考や訳注が国内外で数多く発表、発信される状況が続いており、これらを扱った国内の定期刊行物である、『中国出土資料研究』20（中国出土資料學會）、『漢字學研究』4（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所）、『出土文獻と秦楚文化』9（出土資料と漢字文化研究會）などが巻号を重ねている。他に『中国研究集刊』62（大阪大学中国学会）にも清華簡に関する論文が多数掲載されており、そのなかの文字学的論考として、福田哲之「清華簡『良臣』・『祝辞』の書写者—国別問題再考—」に言及しておく。筆写文字に現れる国別問題を扱う際に、文字の形体と用字習慣に加えて、運筆や点画の構造といった書法的特徴を基準とした分析を加えている点で、本論考は新たな方法論を実践したものと見える。検討の結果、書写者と晋系文字との緊密な関連が指摘された。秦、楚の筆写文字が中心であった簡牘文字研究の分野に、晋系文字との関係が深い資料と新たな方法論が取入れ

られたことにより、今後の戦国文字研究はより精緻なものとなろう。これとともに、甲骨・金文・璽印などの古文字研究領域にもその成果が広がり、共時的にも通時的にも研究が厚みを増すことが期待される。

また、伝世の字書についての論考も昨年から引き続いて発表されており、こちらも今後の展開が待たれる。坂内千里『『説文解字繫傳』「通釋篇」所収の親字について—「疑義篇」考(2)』（『言語文化研究』42）は、『説文』大徐本、小徐本の各部末に記載された親字数を、現行本の実際の収録数と照合することによって、小徐本成立時の原本の実体に接近しようという実証的な試みである。田村加代子『『説文解字』「許敘」段注についての一考察—「文者錯畫也」をめぐる（上）』（『名古屋大学文学部研究論集(文学)』62）は、『説文』叙の段注「文者錯畫也」の「文」の解釈を起点に、関連諸字の『説文』説解や先秦文献を利用しながら、段玉裁によって体系化されていく先秦時代の文字観と、「文」字をめぐる段玉裁の考察の過程を文献学的に解き明かしていく。これらの研究によって、宋代、清代の説文学に新たな知見がもたらされ、文字学界全体の研究水準が高まっていくものと期待したい。

今年の古文字関係の図書は、工具書や入門書がいくつか刊行されたので、関連する文献と共に以下に紹介しておきたい。落合淳思『甲骨文字辞典』（朋友書店）は、徐中舒『甲骨文字典』（四川辞書出版社、1988）や松丸道雄・高嶋謙一『甲骨文字字積綜覧』（東京大学出版会、1994）など甲骨文研究における代表的な工具書が『説文解字』に基づき文字を分類・配列するのに対し、甲骨文の意味により独自の部首をたてて甲骨文1777字を収録したものである。この点は島邦男『殷墟卜辞綜類』（大安、1967〔初版〕、汲古書院、1971〔増訂版〕）と同じ発想だが、本書の126部は島氏の分類（159部）とも異なる著者独自のものである。各字の用例数は限られているが、中には『甲骨文合集』（中華書局、1978-83）刊行以降の新しい甲骨著録から採られた例文が含まれており、先行する工具書と照らし合わせながら利用したい。他に甲骨金文学の分野では、高島敏夫『白川文字学の原点に還る—「甲骨金文学論叢」を読む』（朋友書店）があり、白川静『甲骨金文学論叢』（1955-1962）所収の「積文」「積史」など初期の5論文について、そこで利用された資料や論証の過程を解説し、白川氏の文字学的思考を平易に解き明かそうとしている。なお、白川氏の「積文」と方法論を出発点とし、「文」字の字源と意味を再構築した論考として、張莉「「文」字の民俗学的考察」（『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』9）がある。段注における「文」字を出発点とした前出の田村氏の論考が、段玉裁というフィルターを通して『説文』から諸文献へと展開していくのとは対照的に、こちらは民俗学的な展開をみせ結論に至っている。最後に、戦国文字研究の分野では、陳偉『楚簡冊概論』（湖北教育出版社、2012）が抄訳されて、湯浅邦弘監訳、草野友子・曹方向訳『竹簡学入門—楚簡冊を中心として—』（東方書店）として刊行された。訳者によってこの分野の基礎知識がバランスよく配された総論として構成されており、入門書として幅広い層に利用されよう。簡牘文字の積読方法の変遷を解説した福田哲之「戦国竹簡文字研究略説」（『漢字学研究』4）とあわせて戦国文字研究の手引きとしたい。

なお、前号本欄でとりあげた「戦国楚・秦における前置詞「于」「於」をめぐって」(『中国語学』262)の執筆者名に誤記があった。正しくは宮島和也氏である。訂正してお詫び申し上げる。
(高久由美)

三、訓詁

単行本としては、岩本憲司『春秋學用語集五編』(汲古書院)と六朝樂府の会編著『隋書』音楽志訳注』(和泉書院)を取り上げたい。前者は春秋用語の解説をするというシリーズの一冊で、『経義述聞』の抄訳も収められており、中国哲学部門の書だが、訓詁とも関わりが深い。後者も語学書ではないが、中国音楽という専門家でなければ理解しにくい分野について詳細な注釈が附されている。注釈を施すことはとりもおさず訓詁なので、敢えてこの項で紹介させていただいた。

論文は、音韻の項でも取り上げられている水谷誠「杜甫詩での重複韻字について一破音字をヒントに漢字の桎梏を考える杜甫一」(『中国詩文論叢』35)を挙げておく。「破音」は「四声別義」「音変」「変調構詞」「変音構詞」などとも呼ばれる現象である。小川環樹氏が既に数十年前に「近頃の人は、反切は音を示すものだと思っているのだからね」と嘆かれているように、多音字研究は音韻学の問題と見做されがちだが、実は極めて訓詁学的なテーマである。文字の書に分類されるため文字学と見做される『説文解字』や『説文解字注』を扱う論考も、段玉裁が注に『六書音韻表』を附して「形声相表裏せしむ。崑に因りて推究すれば、古形・古音・古義に於いて互いに求むべし」と述べているように、音韻学的にも訓詁学的にも扱うことが可能である。2016年も訓詁学関連の論考の数は微々たるものだったが、言語の音声も文字も意味を表すための形式である以上、訓詁学は今後も言語研究に欠くことのできない領域であり続けるだろう。

(森賀一恵)

四、文法・語彙(先秦～唐宋)

上古(前漢以前)の文法・語彙を論じたものとして、主に上古の文末助詞“矣”の機能を検討した山田大輔「上中古漢語のテキストにおける〈逆順提示〉を担う形式の変遷について一文末の“矣”と時間副詞“已”を中心に」(『中国語学』263)をとりあげたい。本論文は、『左伝』等の地の文において出来事を発生順とは逆の順序で提示する「逆順提示」が行われる際、先行する出来事を表す文に“矣”が生起することを指摘し、これは上古の“矣”が〈パーフェクト相〉を表す機能を備えていることを示す現象であり、中古文献では当該の機能が主に副詞“已”によって担われていると主張している。上古の“矣”が〈パーフェクト〉を表すとの見解自体は目新しいものではないが、そのタクシスの機能(出来事間の時間的關係を表す機能)に着目することによって、古漢語のアスペクトをより客観的に論じ得る方法論を提出している点が注目になる。なお、本論文は基本的には伝世文献に依拠しているものの、睡虎地秦簡なども併用しており、上古文法研究では出土資料の使用がすでに常識になったことが窺われる。出土資料には、上博楚簡など考古学者による発掘を経ずに学術機関に所蔵された非発掘簡もあり、

その利用方法が今後課題になってくるであろう。その意味で、非発掘簡の真偽を判定する基準を論じた朱鳳瀚「關於中國簡牘的辨偽」(『出土文獻と秦楚文化』9)にも言及しておきたい。本論文は、北京大学歴史学系教授・出土文獻研究所所長であり、簡牘整理の最前線に立つ同氏が、非発掘簡の真偽の基準について簡牘の形式或いは字形・書体の点から紹介したものである。この問題については、さきに大西克也「「非発掘簡」を扱うために」(『出土文獻と秦楚文化』8、2015年)も詳細に論じており、放射性炭素年代測定をはじめとする科学的検査の概要、代表的な非発掘簡の脱色・脱水処理等の実際の整理プロセスなどを紹介している。同論文はさらに字と語との配当関係に着目する「用字論」の観点による真偽弁別の実例を示しており、古漢語語彙研究に対しても多くの示唆を与えてくれる。

中古(後漢魏晋南北朝)の文法・語彙に関するものに、玄幸子「太田辰夫「兼語動詞」再検討・中国口語研究への新視点」(『関西大学東西学術研究所紀要』49)がある。中古文法そのものを論じたものではないが、『賢愚経』の「與」に使役・被動を表す用法があることを踏まえた上で、漢語史の文法化の一般傾向について論じている。すなわち“教(叫)”“給”(或いは中古の“與”)などは、いずれも動詞から使役標識へと文法化し、さらに被動標識へと用法を拡張しているが(太田辰夫氏はいずれも「兼語動詞」とみなす)、使役を表す用法を備えながらも、“令”“使”は被動の用法を獲得しなかったことに注目し、“令”“使”が授与動詞の用法を欠くことにその原因の一つを求めている。そして以上の議論を踏まえた上で、語彙形式の口語性の判定にプロトタイプ遷移(prototype shift)という認知言語学的概念を取り入れることを提案している。中古の「與」であれば、プロトタイプが授与動詞から使役・受動の文法標識へ移っていれば、それが口語性の根拠になるという主張であろう。言語資料や文法項目の口語性については従来から議論があったが、ともすれば恣意的な議論に陥りがちであった。この問題に理論的枠組を取り入れようとする提案は重く受け止めるべきだと考える。山田大輔「漢訳仏典に見える“VP已”の使用と時間副詞“既”の関係」(『火輪』37)は中古の早期漢訳仏典にみられる特殊な文法を扱ったものである。中古の“VP+完了動詞(畢/竟/訖/已)”が現代語における動作の完了を表す“V+了”の来源であることは周知のことであろうが、このうち漢訳仏典にみえる“VP+已”だけが、当該のVPが瞬間動詞でもあり得るなど、現代語の“V+了”に近い性質を備えていた。この特殊性が原典言語の屈折語尾を訳出したことに由来するのか、当時の口語を反映したものなのか、という文法史上の位置づけが、国内外で盛んに論じられてきた。本論文は、このような研究背景を踏まえつつ、漢訳仏典の“VP+已”は歴史的には口語に由来するものの、これが急増した南北朝期にはすでに口語では衰退しており、屈折語尾を可能な限り訳出しようとする機運により急増した形式であり、このとき“VP+已”の意味を明確にするために“既”が付加されたのだという説を提出している。

近古(唐宋)の文法・語彙研究については、まず玄幸子「變文資料を中心とする中国口語史研究再検討」(『敦煌寫本研究年報』10 第一分冊)をとりあげたい。敦煌變文にみえる口語語彙について、蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』が解釈を加えた「灘」、疑問代

名詞としての「没」などを題材に、口語語彙研究の方法に一石を投じている。例えば前者の例では、訓詁の字面の一致を重んじた『通釋』の論証方法に疑義を呈し、当該の字によって示されている「語」の音韻・意味を、字の表記にとらわれずに検討・推定するという方法を提案している。玄氏の主張は、言語研究者からすれば至極当然のことではあるが、実際に運用された例は多いとは言えないであろう。蔡娟『《朱子語類》における方向補語』（『語学教育研究論叢』33）は、『朱子語類』第97～140巻における方向補語を記述・整理したものである。その上で『語類』の複合方向補語については、唐五代の敦煌変文や『祖堂集』のそれと比べて、方向義から派生した結果義・動態義を表すものが増加していることなどを指摘している。近古以降の方向補語は形式上の多様性が顕著であり、それぞれについて機能拡張を正確に跡づけるのは容易ではない。本論文によれば、『語類』には現代標準語にはみられない複合方向補語があるという（“入来”“入去”“起去”）。今後は文法史研究と方言文法研究とをリンクさせ、時間軸と空間軸の双方の視点を取り入れた研究が試みられてもよいのかもしれない。なお、近年は、『朱子語類』の邦訳・注釈が強力に推し進められており、文法史研究者にとっては福音であろう。文献の内容に対する理解が深まることにより、新たな文法現象が見えてくることが期待される。

（松江崇）

五、文法・語彙（近世）

近年では、方言的な要素を考慮せずに小説の言語を研究することは不可能であり、中国でも小説に見られる方言語彙や基礎方言を論じた研究が増加傾向にある。このアプローチは語感の面で劣る外国人にとっては不利な点が多いが、手法の厳密さをもってそれを克服しようとした辞典が二つ刊行された。一つは山田忠司編『老舍北京語辞典』（光生館）で、老舍作品の中に見られる約1,500語を対象に語釈と用例を示す。その採録範囲は『現代漢語詞典』に未収録、または「方言」「口語」の表示が付されたものである。コンパクトながら充実した内容を持ち、日本の近代北京語研究の伝統を継承する優れた成果と言えるだろう。いま一つは植田均編『《醒世姻縁傳》方言語彙辞典』（白帝社）で、完成までに20年を要したという労作である。同作品の中から、現代普通話には継承されていないが方言には継承されている語彙を集め、語釈と用例を記したもので、方言語彙の認定は上と同様『現代漢語詞典』に「方言」の表示があるものを中心とする。漢字の情報のみに基づいて方言語彙を論じることの困難は感じざるを得ないが、北方方言の系譜において『金瓶梅詞話』と『紅樓夢』の間に位置する同作品を読み解く上で参照価値の高い辞書である。

21世紀に入ってからの近世中国語研究は、重点が小説・戯曲等の本土資料から域外資料へとシフトしてきており、成果もそちらが主流になりつつある。満漢対訳資料の関係では、寺村政男『満洲語注音・注釈「玉堂字彙」研究と翻刻・繙訳』（水門の会特刊叢書）午集、未集、申集の3冊が刊行された。2013年から始まったこのシリーズも、2017年には全12冊が完結を迎えるが、これほどのボリュームの仕事計画通りに遂行される寺村氏の熱意と持続力には敬服する。竹越孝編『満漢字清文啓蒙〔会話篇・文法

篇] 校本と索引] (中国語学研究開篇単刊 No.16、好文出版) は、清代に最も盛行した満洲語教科書『清文啓蒙』の会話篇「兼漢満洲套話」と文法篇「清文助語虚字」を対象としたもの。前者は清代北京語の重要資料の一つであり、後者は当時の中国語母語話者がアルタイ系言語の文法をいかに理解したかを窺う上で興味深い資料である。

朝鮮資料関係では、対象が中国語に限定されたものではないが、鄭光(廣剛・木村可奈子訳)『李朝時代の外国語教育』(臨川書店)が重要である。通訳官の養成機関であった司訳院は、伝統的に漢学、蒙学、女真学(のち清学)、倭学の四学体制を取り、中国語学で言うところの朝鮮資料はわずかに漢学部門の教科書・辞書類を指すものに過ぎない。我々が『老乞大』・『朴通事』のみに偏らない知識を得るためにも有益な書と言える。

内容の豊かさと広がりにおいて、近代中国語教育史の双璧をなす書物が、トマス・ウェード『語言自邇集』と呉啓太・鄭永邦『官話指南』であることに異論はなかろうが、内田慶市他編著『語言自邇集の研究』(2015年)に続き、内田慶市・氷野善寛編著『官話指南の書誌的研究 付影印・語彙索引』(文化交渉と言語接触研究・資料叢刊7、好文出版)が刊行されたのは慶賀すべきことである。研究篇に加えて『官話指南』諸版本の影印、即ちその初版(1882)、九江書会版(1893)、『改良民国官話指南』、及び方言版である『滬語指南』(1897)、『土話指南』(1908)、そして語彙索引からなる。とりわけ官話の南北問題に先鞭をつけた太田辰夫「北京語の文法特点」(1965年)が基づいた九江書会版が収められたのは意義深い。「書誌的研究」と銘打つ通り、本書における現存版本の博搜ぶりと記述の詳細さはこれまでの研究を遙かに凌駕しており、特に研究篇のまとめとして示された「官話指南相関図」は圧巻である。さらに、『官話指南』の一部が清代の正音学習書である高静亭『正音撮要』(1834)を素材としていることの指摘も重要で、今後新たな展開を生むことが予想される。

文献目録は地味ながら研究の礎石を形作る重要な仕事である。竹越孝・遠藤光暁主編『元明漢語文献目録』(中西書局)はおおよそ10名の編者による共同作業で、音韻・語彙語法の各分野にわたり、現存する言語資料と日・中・韓・欧文による研究文献を収録する。中国語で書かれていない論文はほぼ無視されるという風潮にあって、中国で出版された同目録がインパクトを持ちうるか、注目される。

2015年10月、日本中国語学会全国大会において「太田辰夫の漢語史研究」というワークショップが開催されたが、その報告論文が『中国語研究』第58号に収められている。即ち、山田忠司「太田辰夫の北京話研究」、大西博子「太田辰夫的吳語研究」、竹越孝「太田辰夫の近代漢語研究：以“漢儿言語”说为中心」、汪維輝「太田辰夫の漢語史研究在中国」に、佐藤晴彦氏による当日のコメント「浅見与请教」を加えたものである。特に汪氏の論文から、太田学説が中国においても未だに影響力を失っていないことを知りうる。

元日本大学教授・鱒澤彰夫氏が長年にわたり収集した中国語教育史関係の蔵書が、一括して関西大学に入ったことは斯界にとって大きなニュースであった。収蔵にあたり陣頭指揮を執った内田慶市氏による「関西大学アジア文化研究センター所蔵『鱒澤文庫』について」(『中国語研究』58)、整理・目録化の実務を担う氷野善寛氏による「19～20

世紀の中国語教育史を研究するための資料 — 鱒澤彰夫氏寄贈図書目録編纂作業とその特徴」(『関西大学東西学術研究所紀要』49)は、中国語教育史のコレクションとしては日本最大規模と目される同文庫の全般的な状況を紹介したもの。内田氏によると、鱒澤文庫は今後100年にわたり研究ソースを提供し続けるとのことであり、この宝の山をどう生かしていくかが日本の中国語研究における一つの課題になるであろう。

中国における近代漢語研究がかつてない活況を呈している今、中国人と同じ対象を同じようなアプローチで扱っていても埋没していただくだけである。近年の研究は、日本の研究者ができることは何か、どのような成果を世に問うていくべきかといった模索を体現するものと言える。(竹越孝)

六、現代語文法

目録に収録された現代中国語文法に関するおおよそ120編の論文のうち、補語を扱ったものが17編、視点に関するものが10編、空間表現に関するものが11編、ヴォイスが7編、アスペクト形式を扱ったものが10編、焦点構文(“是～的”構文)を扱ったものが7編であった。補語を扱った17編のうち、半数近い8編が方向補語であり、視点に含めた論文のうちの2編が空間指示や存在文の分析で、アスペクトに含めた論文のうちの2編が存在文の“V着”に関する論考、さらに、現代文法分野の学術書6冊のうち、1冊が島村典子『現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究』(好文出版)であったことを考え合わせると、2016年は空間表現に関する多くの成果が上がった年であったと言える。

アスペクトの論考のうち、最も注目すべきは郭銳「汉语叙述方式的改变和“了₁”结句现象」(『中国語学』263)である。この論文は、対話と独話における“了₁”の文終止に関する振る舞いが異なることを論じたもので、文終止を決定づけるのは「外部時間参照」と「内部時間参照」を明示する要素であるとし、完了を表す動詞接尾辞の“了₁”が「内部時間参照」であるのに対して、“了₂”などの文末助詞は「外部時間参照」であると指摘する。また、“了₁”が過去時制の標識に発展しているという記述も見られる。“着”に関しては、前年に引き続き時衛国氏が丁寧な記述的対照研究を蓄積している。

結果補語については、今年も昨年同様、楊明氏が精力的に3本の論考を相次いで発表している。氏の研究は、主として認知言語学の中でもラネカー(Ronald W. Langacker)の枠組に基づいて中国語の結果構文をschemeとして記述する試みである。これに対し、生成統語論、語彙概念構造の枠組を批判的に用いた手堅い分析として、結果複合動詞に関する日中対照研究である山森良枝「中国語の結果複合動詞について—日本語の結果複合動詞との対照から—」(『同志社大学グローバル地域文化学会紀要』6)を挙げておきたい。

空間表現に関する論考の中では、まず空間詞については、王棋「“NP上”和“NP下”的语义优先识解」(『神戸市外国語大学研究科論集』19)が周到であり、分析内容、用例共に充実している。存在文については、島津幸子「“着”存現文と“了”存現文の意味機能」(『漢語与漢語教育研究』7)が、古典的な課題について、伝統的なアプロー

チながら新たな観点を取り出すことに成功している。手堅く素直な立論に好感が持てる論文である。空間移動表現については、上述の島村氏の著書が、タルミー (L.Talmy “Semantics and syntax of motion”, J.Kimball(ed.) *Syntax and Semantics* 4, 1975) の枠組に依拠して方向補語を類型論的に分析した労作である。

ヴォイスに関する論文は、特に受身を扱ったものの全てが日中対照研究であった。中でも、加藤晴子「日中対訳小説に見る受身形の使用状況と視点の関係」(『東京外国語大学論集』92) と、彭広陸氏「日中両語のヴォイスに見られる視点のあり方」(小野正樹・李奇楠編『言語の主観性』, くろしお出版) が、それぞれ、日本語を母語とする中国語学者と、中国語を母語とする日本語学者が、日中の受身表現の差異を「視点」の用法に求めている点が評者には首肯できるところである。また、王亜新「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』18) も、日本語学の枠組に依拠した対照研究として直接受動文に関する整理が試みられている。楊華『中日両言語における形式動詞の対照研究』(朋友書店) は、両言語の動詞の形態論から、機能語化する様々な動詞を体系的に俯瞰しようという試みである。ヴォイス、アスペクト、ムード、前置詞に分析が広がり、野心的で充実した一冊であると言える。

「視点」に関する論文が10編と多かったことも2016年の傾向の一つである。まず、『北研学刊』13号(広島大学北京研究中心)が「視点、他動性及びその周辺」の特集号であった。この他、上田裕「視点の取り方から見た名詞一語文と存在文の成立条件一発見の状況を中心に」(『中国語学』263) は、従来ヴォイスや空間移動、授受表現の分析に用いられてきた「視点」概念を新たな文法項目の分析に用いている点で斬新である。

“是～的”構文に関する論考が8編というのは、中国語文法における重要な構文の中でも授受構文に関する論文が2編だったことを鑑みると、やはり当年度の大きな傾向であるように思われる。憶測に過ぎないが、2016年の日本中国語学会第65回全国大会(東京大学)シンポジウムにおける楊凱榮氏と杉村博文氏による議論の盛り上がりは無関係ではないのではないかと。当日の議論の内容は主として、動詞の項の意味役割によって、“是～的”構文を用いた焦点化の可否に階層性が生じる、というものであった。この議論は楊凱榮「句中成分的焦点活动因及优先度等级—从事件句到说明句」(『中国語学』263) にまとめられており、当年度の優れた成果の一つである。

重ね型は、池田晋氏が動詞に関する2本の論文を発表しており、桂雯氏は形容詞の重ね型と“的”の機能を広東語と対照させる試みを発表している。また、もし対句が節レベルの重ね型だと認められるようであれば、王峰「現代汉语对举格式中的范畴化认知与概念整合模式」(『漢語与漢語教学研究』7) もこの分野にカウントできるだろう。そうすると、重ね型は5編であり、さらに、張恒悦氏が『現代中国語の重ね型—認知言語学的アプローチ』(白帝社) を出版されたことから、当年度大きく進展した分野の一つに挙げることができる。重ね型は中国語における唯一の語形変化でありながら、どのレベルの言語要素(形態素から節)にも、いずれの品詞にも観察できることから、中国語の類型的な特徴に迫ることのできる重要な研究テーマであるが、張氏は正にこの問題意識から研究を進めているものである。

方言文法の研究は少ないながら質が高く、興味深い問題提起を含むものが多い。小嶋美由紀「中国西北方言における“我咱 VP”と“你咱 VP”」（『関西大学中国文学会紀要』37）は、中国語における「間主観性」や、再帰性とヴォイスの問題を考える上で重要な材料を提供するものである。（下地早智子）

七、方言

まず遠藤雅裕『台湾海陸客家語語彙集』（中央大学出版部）を取り上げたい。本書は10年以上に及ぶ遠藤氏の台湾客家語研究が結実したものである。6,000語近くを収録し、各語には日本語訳・標準中国語訳・英語訳が付され、各国の研究者が利用できるように工夫されている。「語彙集」と銘打たれてはいるものの、本書は用例も豊富に収録している。その充実ぶりは『現代漢語方言大詞典・分巻』に勝るとも劣らない。非母語話者による漢語方言の記述としては非常に高い水準にあると思う。

曹志耘、秋谷裕幸（主編）、曹志耘、秋谷裕幸、黄曉東、太田斎、趙日新、劉祥柏、王正剛（著）『吳語婺州方言研究』（商務印書館）は浙江省金華市に分布する吳語金衢方言群（＝婺州方言群）7方言（金華、湯溪、浦江、東陽、磐安、永康、武義）の調査報告である。各方言の同音字表を取めるとともに、600語、100例文を記述する。また金衢方言群の音韻特徴、語彙特徴そして文法特徴の分析も行っている。従来から内部差異の大きさが注目されてきた金衢方言群であるが、本書はそれを言語学的に示すことにおおむね成功している。吳語を北部吳語と南部吳語に二分する考えは広く受け入れられている。金衢方言群は上麗方言群（＝処衢方言群）、甌江方言群とともに南部吳語を構成する。本書によれば金衢方言群は上麗方言群と系統的に近い関係にあり、甌江方言群は南部吳語のなかで孤立している。この知見は今後の吳語史研究に重要な意味をもつと思われる。

秋谷裕幸、徐朋彪『韓城方言調査研究』（中華書局）は陝西省韓城方言の音韻、語彙、文法にわたる詳細な記述である。韓城方言が属する中原官話汾河方言群は官話方言の中でも際だって保守的な方言群であり、官話方言あるいは北方語の歴史的研究にきわめて重要な意味をもっている。たとえば韓城方言は鼻音韻尾 *m と *n の音韻対立を主母音の違いとして組織的に保存するが（「庵」≠「安」、「深」≠「身」等）、この音韻対立は官話方言のなかで韓城方言とその対岸の山西省河津方言にのみ保存されている。また「鑊」が「馬などの家畜に水を飲ませるためのかめ」と意味を変えながらも使われ続けていることにも驚かされる。

以上三点はいずれも方言記述を主体とした研究成果である。標準語の普及により、圧倒的大多数の漢語方言はその存続が危機的な状況にある。我々の眼前で漢語方言が標準語へと収束しつつある。台湾客家語、金衢方言群、韓城方言もこの歴史的潮流のただ中にある。この流れを変えることはもはや不可能であり、遠くない将来、現在の日本のような言語状況が中国にも出現するに違いない。中国において2015年から始まった教育部中国語言資源保護工程（<http://www.chinalanguages.org/>）もこのような現状に対する危機感を背景としている。六十歳前後のインフォーマントでは伝統的方言の調査が困

難となっていることからすると、調査のために残された時間はあと二十年程度ではあるまいか。膨大な未調査方言とわずかな残り時間、これこそ漢語方言研究の直面する絶望的な現実なのである。今、漢語方言研究が取り組まなければならないのは方言調査においてほかにはない。その意味で、胡貴躍「中国・徽州方言の音韻的諸特徴」（『人間社会環境研究』32）や陳学雄「漢語福清方言の音節結合時における音声実現の問題について」（『神戸市外国語大学研究科論集』19）から窺われるように、方言記述に興味を示す若い研究者が育ちつつあるのは頼もしい。

最後に方言記述以外の研究成果を一点取り上げる。遠藤光暁『元代音研究—『脈訣』ペルシャ語訳による—』（汲古書院）は、「音韻」の項でも取り上げられているが、漢語方言学から見ても見逃せない研究成果である。遠藤氏によれば『脈訣』ペルシャ語訳には少なくとも五人の話者が参加した。本書はその五名それぞれの基礎方言を推定している。その過程で元代には一部の贛語で中古全濁音がすでに無声有気音化していた等の漢語方言音韻史的に重要な知見を得ている。比較方法により再構される贛語祖語には有声閉鎖音、破擦音が存在し、有声音の無声化が起こっていない。つまり贛語祖語は、かりにそれが現実存在したとすると、少なくとも元代以前には遡ることが分かる。遠藤氏が抽出に成功した『脈訣』ペルシャ語訳における元代方言データを精査することにより、他にも絶対年代の下限を与え得る漢語方言音韻史上の現象を見いだしうる可能性がある。古い段階に遡る文献資料がほとんど存在しないことが漢語方言史研究を著しく制約していることを考えるならば、本書の漢語方言史研究に対する意義はきわめて大なるものがあると判断される。

（秋谷裕幸）